

プラトン著『国家』五～七巻

一～四巻までのあらすじ

〈正義〉とは何かという問題

- 〈正〉 〈不正〉とは何であるか、またそれぞれが純粋にそれ自体としてどのような力を持つものなのか
 - ・ より大きなものの中にある〈正義〉のほうが、いっそう大きくて学びやすい。よってまず国家における正義について探求する。
国家が生まれてくる次第を言論の上で観察することで、国家の〈正義〉と〈不正〉とが生じてくるところもまた見ることができる。
- 国の守護者に求められる自然的素質：自然本来の素質において、知を愛し、気概があり、敏速で、強い人間であるべき。
- ◎ 守護者はどのような仕方で養育され、教育されるべきか
 - ・ 体育（身体）よりも音楽・文芸（魂）を優先すべき。
物語の作り手たちを監督しなければならない。何を語るべきか…追放すべき物語
歌と曲調のあり方
- 支配者、補助者
- 国家の徳目——〈知恵〉、〈勇氣〉、〈節制〉、〈正義〉
- 個人における〈正義〉
- ◎ 国家が正しい国家であるとされる条件：国家の中に異なった3つの種族があり、それぞれ自己本来の仕事を行なっていること。
〈理知的部分〉、〈気概の部分〉、〈欲望的部分〉
〈正義〉は、このような魂の状態を保全することであり、〈不正〉は反対に、自然本来のあり方に反した仕方での支配関係をつくらうとすることである。
——こののち、国制のあり方についての議論がなされる。

第五巻

- 三つのパドクス（「大浪」）…守護者としての男女両性の任務とそのための教育の平等、妻子共有、理想国家の実現可能性
- ◎ 男女両性における同一の職務と同一の教育
 - ・ 人はそれぞれの持って生まれた自然本来の素質に応じた仕事を行わなければならないとすれば、男女間で自然本来の素質は大いに異なるのだから、矛盾ではないか？
← 守護者のどのような技術、どのような仕事に関して、女と男との自然本来の素質は同じではなくて異なっているのが問題。
——女も男も、それぞれ個々人の自然的素質に応じてどのような仕事にもあずかれる。
国家を守護するという任務に必要な自然的素質そのものは、女のそれも男のそれも同じ。
 - ・ 国の守護者を作り上げるための教育は、その教育に委ねられる自然的素質が同じものである以上男女別々であるはずはない。
- ◎ 女性・子供の共有
 - ・ 家畜の話→優れた子供を得るために、最も優れた男たちは最も優れた女たちと交わる。国家の規模を適正なものに保つため、結婚の数は支配者の裁量によって決められる。

- ・ 守護者たちの種族を純粹のまま維持するための方策：優れた人々の子供は隔離された保育所へ運び、保母たちの手に委ねられる。劣っている者の子供や欠陥児は育てない。
守護者の妻たちの子供づくりを楽にするために、どの母親にも自分の子がわからぬようにして、骨の折れる子育ての仕事は乳母や保母にやらせる。
- ・ 子供は壮年の盛りにある者たちから生まれなければならない。若すぎる者や年寄りらが子作りをしたり、適齢期でも支配者がめあわせたのでない女性と関係したりすることは、神の意にも人の正義にも反する。
- ・ 国家にとって、国を結合させて一つの国たらしめることよりも善いことはない。結合させるには、できる限り全ての国民が得失に関して苦楽を共有することが最善。
…一人の人間のあり方に最も近い状態にある国が、最もよく治められている国家
——守護者仲間はお互いのことを親族のように考え、扱う。
守護者が妻子を共有することは国家に最大の善をもたらす…真実の守護者を作り出す。
守護者の間では裁判や訴訟、争いは起こりえないので、他の国民が離反することもない。

◎戦争について

- ・ 将来戦士となるべき子供を戦争に連れて行き、戦争を経験させ見習わせる。
- ・ 持ち場を放棄したり、卑怯な振舞いをした者は戦士から格下げされる。捕虜になった者の扱いは、敵の好きにさせる。他方、戦争で功をあげて最期を遂げた者は、聖なる神霊となるので、アポロンの神託に従い特別な榮譽をもって埋葬する。
- ・ 戦争と内乱の区別（ギリシア人と他民族の区別）
〈内乱〉…身内のもの・同族のものにおける敵対関係。
ギリシア人同士は自然本来には友であるが、内乱はギリシアが病んで内部が割れている状態。相手を懲らしめる場合も善意をもって正す。奴隷・殲滅の禁止。
〈戦争〉…よそのもの・異民族のものにおける敵対関係。ギリシア人と夷狄とは自然本来の敵。容赦する必要はない。

◎今まで述べてきたような国制は実現可能か、またいかにして実現可能であるか

- ・ 完全に正しい人間がいたとしたらそれはどのような人間であるか、という議論は、模範を求めてのこと。模範が現実存在しうることを証明するためではない。言葉で語られると通りの事柄がそのまま行為のうちに実現するわけではない。しかし現実存在しうることを証明できないからといって、模範について検討する議論が価値を失うことはない。
- ・ 統治のあり方を阻害する欠陥にたいする変革は、できるだけ回数が少なく、小範囲にとどまるものが望ましい。その変革のための条件として、哲学者が王となって統治することが必要になる。政治的権力と哲学的精神とが一体化。

- 哲学者（愛知者）：あらゆる知恵を全て欲する。真実を観ることを愛する人たち。〈美〉そのものが確在することを信じ、それ自体とそれを分けもっているものとをともに観てとることができる。彼らのその精神のあり方は〈知識〉である（⇔〈思わく〉）。
 - ・ 人間はありもしないものを知ることはできない。完全にあるものは完全に知られうるものであり、全くあらぬものは全く知りえないものである。〈あるもの〉には〈知識〉が対応し、〈無知〉は必然的に〈あらぬもの〉に対応する。純粹にあるものと全くあらぬものとの中間のものは、〈知識〉と〈無知〉との中間にある〈思わく〉を求める。
- つまり、〈美〉その他について多く人々がもつ雑多な考えは、純粹に〈あるもの〉と純粹に

〈あらぬもの〉との中間をさまよっているものである。そのような性格のものは〈思わくされるもの〉。つまり純粋なそのものを観得するのではなく、万事を思わくしているだけであって、その思わくしているものを何一つ、本当に知ってはいない。しかしそれぞれのもの自体を観得する人たちは知っているのであって、思わくしているのではない。それぞれのもの自体に愛着を寄せる人々は〈愛知者〉〈哲学者〉と呼ばれる。

第六卷

●哲人支配に関する諸問題…哲学者の素質、哲学無用論、哲学的素質の墮落、にせ哲学者

◎哲学者の国家の統治に適した自然的素質…偽りのなさ、真実を愛すること。生来の自然的素質において記憶がよく、ものわかりがよく、度量が大きく、優雅で、真理と正義と勇氣と節制とを愛する。

◎現実に哲学の抱える問題

- ・必要以上に長い間哲学に時を過ごした人たち→正常な人間から程遠い人になってしまい、国家社会に役立たない人間となってしまう。
- …哲学をしている最も優れた人々でさえ、一般大衆にとっては役に立たない人間である。しかし役に立たないことの責は、役に立てようとしない者達にこそ問うべきで、優れた人々自身に問うべきではない。最も立派な仕事、それと正反対の仕事に携わっている者達からよく言われるということは期待しがたい。

○なぜ、多くの人々が碌でなしにならざるを得ないのか？

- ・優れた人物になるために必要な自然的素質において、導き手となるのは〈真実〉。
 - …このような自然的素質は、多くの人々の場合損なわれていく。自然的素質は、悪いものとより強い反対関係にあるので、悪い教育を受けると特別に悪い魂になってしまう。
 - ・ソフィスト・大衆の教育…公の場における非難・賞賛の洪水で、若者に彼ら群集の価値観を受け入れることを強いる。自分たちの言うことを聞かぬ者に対して、罰則などの強制力をもって応じる。教育に反するような教育。善悪の基準は、知識でなく経験に基づく。
 - ・大衆は、多くの事物ならぬそれぞれのもの自体の存在を容認したり信じたりすることはありえないので、哲学をしている人々が大衆から非難されることは避けられない。
 - ・卑しい人々、教養に値しない人々が哲学に交わる→〈にせ知識〉〈詭弁〉
 - …こうして、資格ある人々のうち、残るのはごく僅か。不健全な国の政治を正すために戦うことも望めないで、自分自身に対しても他人に対しても無益な人間として終わり、自分自身が何とか汚されることがないように静かに自分の仕事だけをするを選ぶ。
- しかし、彼の住む国家のあり方が自分の素質と適合したものであれば、彼はもっと成長するし、個人的なものとともに公共の事柄をも救うことができる。

◎哲学に適合した国家のあり方

○問題：哲学という仕事を国家がどのような仕方で扱うならば、亡びを免れることができるか

- ・国家が哲学という仕事を扱う方法…現状と全く反対でなければならない。
- ・大衆対策…穏やかに言い聞かせる気持ちで学問に対する偏見を解く。〈哲学者〉についての説明をきちんとすれば、彼らも意見を変えるだろう。大体、哲学に対する悪評のそもそもの責任は、最もふさわしくなくせに哲学に入ってきた騒々しい連中にある。
- ・哲学者が、真実在の世界で目にするものを人間たちの品性の中に作りこむ…民衆が持ちうる

全ての徳の、優れた作り手となる。 彼らは真実在に目を向けるとともに、他方で人間の中に作りこもうとしているその写しにも交互に目を向ける。模範像を範として判断しながら、人間の品性を可能な限り神に愛される性格にする。

——ソクラテスらが議論した立法案は、もし実現できれば最善のものであり、その実現は困難ではあるが決して不可能ではない。

●哲人統治者のための知的教育

◎哲人統治者となりうる自然的素質をもつ者は、きわめて少数

素質を全て兼ね備えた者は滅多に現れない。それを見極めるために、さまざまな労苦や恐怖や快樂の中でよく検査しなければならないし、最大の学業—〈善〉の実相（イデア）も学ばせなければならない。他の全ての事柄に知恵を持ちながら、美しいもの・善いものについては何の知恵もないとしたら、その知恵は何の足しにもならない。

- ・守護者が、いろいろの正しい事柄や美しい事柄はそもそもいかなる点で善いものであるのかを知らないとしたら問題。それをしっかり知っている守護者がこれを監督してはじめて、その完全なる秩序が確保されることになる。

…ソクラテスは〈善〉それ自体は何なのかという問いには直接答えず、〈善〉に最も似ているように見えるものを語る。

- ・多くの美しいもの、善いもの、さらに同様にしてそれぞれいろいろのものがある。それに対し、〈美〉そのもの、〈善〉そのものがあり、同様にそれぞれのものの単一の相に応じてただ一つだけ実相（イデア）、〈まさにそれぞれであるところのもの〉がある。

前者は見られるものだが思惟によって知られることはなく、他方実相（イデア）は思惟によって知られるが見られることはない。

…視覚と、見られる機能とを結びつけるものは光という貴重なものである。目は自分のもつ機能を、太陽から注ぎ込まれるようにしてまかなわれながら所有している。

——思惟によって知られる世界（可知界）において、〈善〉が〈知るもの〉と〈知られるもの〉に対して持つ関係は、見られる世界（可視界）において太陽が〈見るもの〉と〈見られるもの〉に対して持つ関係とちょうど同じ。

…魂が〈真〉と〈有〉が照らしているものへと向けられてそこに落ち着くときには、知が目覚めてそのものを認識し、その魂は知性を持っていると見られる。

⇒○太陽の比喩：認識される対象には真理性を提供し、認識する主体には認識機能を提供するものこそが、〈善〉の実相（イデア）にはほかならない。認識と真理はともに美しいものであるが、〈善〉はこの両者とは別のものであり、これらよりもさらに美しい。知識と真理は、光と視覚を太陽に似たものとみなすのは正しいが、それがそのまま太陽であると考えるのは正しくないのと同じように、これらを〈善〉と似たものとみなすのは正しいが、それが〈善〉であると考えるのは正しくない。〈善〉のあり方はもっと貴重なものの。

太陽が見られる事物を生育させ、成長させるものであるのと同様に、認識の対象となる諸々のものにとっても、あるということ・その実在性は〈善〉によって備わる。

○線分の比喩：〈見られるもの〉（可視界）と〈思惟によって知られるもの〉（可知界）の線分

下 [AD] — [DC] — [CE] — [EB] 上

([AC] : [CB] = [AD] : [DC] = [CE] : [EB])

可視界 [AC] … [AD] は似像を表し、[DC] はその似像が似ている原物を表す。

可知界 [CB] … [CE] は似像、[EB] はその原物。

- …真実性の有無の度合いに応じて、〈思わくされるもの（見られる領域）〉の〈認識されるもの〉に対する関係がそのまま、似像の原物に対する関係と等しくあるように分割
- ・ 〈思惟によって知られるもの〉のうち、魂（精神）は [CE] の探求に当たってはさまざまの仮説（前提）を用いざるをえず、始原にまでさかのぼることなく結末へと進んでいく。
- [EB] …理（ロゴス）がそれ自身で、問答（対話）の力によって把握するもの。仮説を踏み台として、ついに万有の始原に到達する。そしていったんその始原を把握した上で、今度は逆に始原に連絡するものを次々と触れたどりながら結末に至るまで下降していくが、その際感覚されるものを補助的にもちいることはなく、ただ〈実相〉だけを用いて、〈実相〉を通して〈実相〉へと動き、そして最後に〈実相〉において終わる
- …問答（対話）の知識によって観得されるものは、『学術』により考察されるものよりも明確
- [EB] … 〈知性的思惟〉（直接知）、[CE] … 〈悟性的思考〉（間接知）
 - [DC] … 〈確信〉（直接的知覚）、[AD] … 〈影像知覚〉（間接的知覚）
- これらの精神状態は、それぞれの対象が真実性にあずかっているのに対応して、それと同じ度合で明確性にあずかっている。

第七卷

●教育

◎洞窟の比喻：教育と無教育

—地下の洞窟の中の人間たちは鎖で縛られ動けず、顔も壁ばかり見るようにされている。この囚人の後ろには火が燃えている。その火と囚人の間に道があり、そこを人や物が通る。囚人たちは、その影だけを真実のものと思い込む。

彼らに急に真実を見せても、理解できずに影のほうが真実性があると考えてしまうので、徐々に目を慣らしていく必要がある。そうして最後に太陽それ自体〈アイデアのたとえ〉を見る。彼はもはやかつての洞窟に帰ることは望まないし、仮に帰っても囚人たちは彼を受け入れない。

- ・教育というのは、知識がない魂に知識を外から教師が入れるというものではない。人間には真理を知るための機能とそれによって学び知るところの器官がはじめから魂の中に内在している。それを魂の全体と一緒に、実在および実在のうち最も光り輝くもの（＝〈善〉）を観ることに耐えうるようになるまで導いていかなければならない。
- …教育とは、その器官の転向を最も効果的に行う方法を考える向け変えの技術。この向け変えいかんによって魂のあり方はよくもなるし悪くもなる。
- ・教育を積むだけで実践に参加しない者は国の統治は出来ない。最も優れた素質をもつ者たちを〈善〉の実相を見ることが出来るように強制し、つぎにそのまま上方にとどまらせずに、もう一度前の囚人仲間のところに降りて来させ、彼らとともにその苦勞と名誉を

分かち合わせる。

◎真実在への上昇を可能とするまことの哲学とはどんな学問か…全ての技術・思考・知識が共有しなければならないも学問

…ひとつめは算と計算。

- ・感覚だけでは十分に把握できない問題→魂は思惟（計算能力）と知性に訴えて解決—それ自体としてそもそも何であるかを問わざるをえないこの性格は、真実在へと導くもの

…次の学問は、幾何。平面と立体

- ・幾何が知ろうとすることは、つねにあるものであって、時によって生滅するものではない。それゆえ、それは魂を真理へ引っ張っていく力がある。

…4番目は、天文学。天空を飾る星々は、目に見えぬ実在を目指して学ぶための模型

目が天文学と密接な関係において形作られているのと同様に、音階の調和をなす運動と野密接な関係のもとに耳は形作られているので、音階の調和も同じように扱う。

- ・諸学科相互間の内的な結びつきと同族的な関係を総合的な見地から勘考する。それは哲学的な対話・問答—哲学的問答法によって行う。

*第六巻の心の状態の線分：[CB]を〈知性〉のはたらき、[AC]を〈思わく〉の状態と呼ぶ。〈思わく〉は生成に関わり、〈知性〉は実在に関わる。

〈実在〉：〈生成〉＝〈知性〉：〈思わく〉＝〈知識〉：〈確信〉

- ・諸学科の配分…哲学的問答法を学ぶために必ず前もって履修する予備教育に属する事柄は、少年時代に課す。学習は強制ではなく、むしろ自由に遊ばせる形で行う。そのうち、選ばれた者に対して、二十歳となったら雑然と学習したことを総合して、相互化の、また実在の本性との内部的な結びつきを総観するところまでいかせる。さらに選ばれた者についてはその後哲学的な訓練を課す。そして50歳まで公務の訓練をつんだ最も優れた者が50歳以後交代で統治に当たる。後継者を育てたら、彼らは〈幸福者の島〉へと去る。国家は彼らを讃え、記念する。

—こうして、国家についても、国家に相似た人間についても、議論が尽くされた。